音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高める中学校音楽科学習指導の工夫
― 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動を通して ―

呉市立倉橋中学校　赤石　有隆

研究の要約

本研究は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高める学習指導の工夫について，考察したものである。文献研究から，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を，様々な音楽について知覚・感受したことを基に，音楽の特徴と音楽を生み出した風土，文化，歴史，人々の生活との関連を理解して批評する能力と定義した。また，この能力を高めるためには，様々な音楽の特徴を捉える場面において，音楽による表現活動と言語による表現活動を取り入れ，音楽を生み出した風土，文化，歴史，人々の生活との関連を理解することが有効であると考えた。この学習活動を取り入れ，研究授業を行った結果，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることができた。このことから，様々な音楽の特徴を捉えるために，音楽による表現活動と言語による表現活動を関連付けて取り入れることは，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることに有効であることが分かった。

キーワード：音楽の特徴を捉える表現活動

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年）音楽（以下，「指導要領」とする。）の第２学年及び第３学年の２内容Ｂ鑑賞の指導事項ウに「我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して，鑑賞すること。」[1] と示されている。

国立教育政策研究所は，特定の課題に関する調査（中学校音楽）調査結果（平成22年）において，時代や地域などによって生み出された音楽の特徴について知覚しているかどうか調べた結果を公表している。音楽を聴いて，テクスチュアの特徴を選択する問題では，全て正答した通過率が46.1％であった。同研究所は，多声的なテクスチュアの特徴を捉えることについて課題があるとしている。この結果から，テクスチュアの違いを比較しながら聴き，複数の声部のかかわり合いの特徴を捉えることができるよう指導の工夫が求められていると考える。

そこで本研究では，鑑賞の学習活動において，我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉えるために，次の二つの表現活動を関連付けて取り入れることとする。一つ目は，テクスチュアに着目し，その特徴について確かめながら実際に楽器などで演奏するという音楽による表現活動である。二つ目は，掲示物で可視化したテクスチュアの特徴について，音楽を聴いて共通点や相違点を言葉などで意見交換するという言語による表現活動である。これらの活動を通して，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力が高まると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　音楽の多様性を理解して鑑賞する能力

(1) 音楽の多様性を理解するとは

中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年，以下，「解説」とする。）では，「『音楽の多様性を理解』するとは，単に多くの音楽があることを知識として得るだけではなく，人々の暮らしとともに音楽文化があり，そのことによって様々な特徴をもつ音楽が存在していることを理解することである。」[2] と述べている。坂本暁美（2009）は，音楽の多様性について，「単に様々な音楽を紹介するのではなく，その音楽を生み出した風土，文化，歴史，人々の生活と関連付けて学習すること。」[3] と述べている。また，音楽の多様性を理解することについて，斉藤百合子（2009）は，「単に『我が国の民謡には追分様式という無拍の音楽がある』などと知識として理解することではなく，実際音楽を聴き，拍について知覚・感受し，それをうたう人々の生活や景色を思い浮かべて，初めて『無拍』という音楽の多様性を理解できるのである。」[4] と述べている。

これらのことから，音楽の多様性を理解するとは，

様々な音楽について知覚・感受し，音楽の特徴とその音楽を生み出した風土，文化，歴史，人々の生活との関連を理解することとする。

(2) 音楽の多様性を理解して鑑賞する能力とは

神保常彦（1988）は音楽大事典の中で，鑑賞とは「美的享受 ästhetischer Genuss〔独〕という用語もしばしば鑑賞とほとんど同義に使われるが，『享受』の語には受容面が強く伴うのに対し，鑑賞には価値評価が含まれる。鑑賞における評価や批判の要素を強調すれば，鑑賞は批評につながっていく。」[5]と述べている。西園芳信（2009）は「『鑑賞の能力』は，音楽の要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きによって生まれる特質や雰囲気を感受したことを基にして，音楽に対する自分の解釈や味わいを他者と共有するために，音楽用語や語彙を使い，言葉にしたり批評文にしたりする能力を指す。」[6]と述べている。また，田中龍三（2009）は，「鑑賞の授業では，生徒は，聴いた音楽の何が自分によさや美しさを感じさせたのか，自分はその音楽のどこが気に入ったのか，さらになぜそこが気に入ったのかについて批評する力を付けるのである。」[7]と述べている。

このように，鑑賞の授業では，知覚・感受を基にして音楽に対する自分の解釈や価値判断など，批評する能力を身に付けるものであることが分かる。

そこで，本研究において，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力とは，様々な音楽について音楽の要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きによって生まれる特質や雰囲気を感受したこと(以下,「知覚・感受」とする。）したことを基に，音楽の特徴と音楽を生み出した風土，文化，歴史，人々の生活（以下,「音楽を生んだ背景」とする。）との関連を理解して批評する能力とする。

２　我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉えることについて

(1) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽とは

「指導要領」第２学年及び第３学年の内容「Ｂ鑑賞」は「鑑賞教材は，我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち，指導のねらいに適切なものを取り扱う。」[8]と示している。また，藤沢章彦（2012）は，「『多様な音楽』とは，地域や時代，ジャンル，演奏形態など様々な音楽を示すものである。いわば地球上のあらゆる音楽と言ってもよい。もちろん，すべての音楽を授業で取り上げることはできないので，できるだけ幅広く，そのねらいを見据えた授業内容や方法を工夫，研究していかなくてはならない。」[9]と述べている。

これらのことから，我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽とは，幅広い地域や時代，ジャンル，演奏形態などいわば地球上のあらゆる音楽を教材にすることができるということが分かる。また，鑑賞教材は，これらの音楽から，授業のねらいにあったものを選択し，指導を工夫することが重要であると考える。

(2) 音楽の特徴について

西園芳信・伊野義博（2010）らは，音楽の特徴について，「音楽を形づくっている要素や構造からとらえるものである。実際，生徒は教材とする音楽の要素や構造を聴きとらえ，それによって醸し出される曲想を感じ取りながら，音楽の特徴を明らかにしていくことになる。」[10]と述べている。また，小原光一・渡辺學而（平成20年）らは，「『音楽の特徴』とは，学習指導要領（平成20年３月）に示された〔共通事項〕に関わる内容であり，音楽の学習のベースになると考える。」[11]と述べている。次に「指導要領」の〔共通事項〕アを下に示す。

音色，リズム，速度，旋律，テクスチュア，強弱，形式，構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること。

〔共通事項〕ア

音楽の構造について，西園ら（2010）は，「要素や要素同士の関連及び音楽全体がどのように成り立っているかなど，音や要素の関係性，音楽の構成や展開の有り様といえる。」[12]と述べている。また，曲想について，西園ら（2010）は，「その音楽固有の表情，雰囲気，気分や味わい」[13]と述べている。これらのことから，本研究では，音楽の特徴は，音楽を形づくっている要素や要素同士の関連とそれらの働きが生み出すその音楽固有の特質や雰囲気と捉えることとする。

なお，前述の通り，音楽の特徴について国立教育政策研究所は，多声的なテクスチュアの特徴を捉えることに課題があるとしている。したがって，本研究では，音楽の特徴を捉える学習活動について，特にテクスチュアについての特徴を捉えることのできる教材を扱うこととする。

(3) 音楽の特徴の共通性と固有性について

「解説」では，音楽の特徴の指導について，「我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の共

通点や相違点，あるいはその音楽だけに見られる固有性などから，音楽の多様性を理解できるようにすることが大切である。」[14]と述べている。このことから，音楽を比較聴取させる場合に，共通点や相違点，その音楽のもつ固有性が重要であることが分かる。高須一（2012）は，音楽の要素から捉える共通性と固有性について，「〔共通事項〕は特定の音楽に関る（原文ママ）ものではなく，世界中の様々な国の音楽に共通に含まれているものでもあります。すなわち，すべての音楽に共通して存在する音楽の要素を示したのが〔共通事項〕における音楽の要素であり，そこで示されている共通の要素で，様々な音楽を理解する手がかりを紐解くと同時に，共通性との比較によって様々な音楽の固有性が一層明確になるのです。」[15]と述べている。この，高須による我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の共通性と固有性の関係を図１に示す。

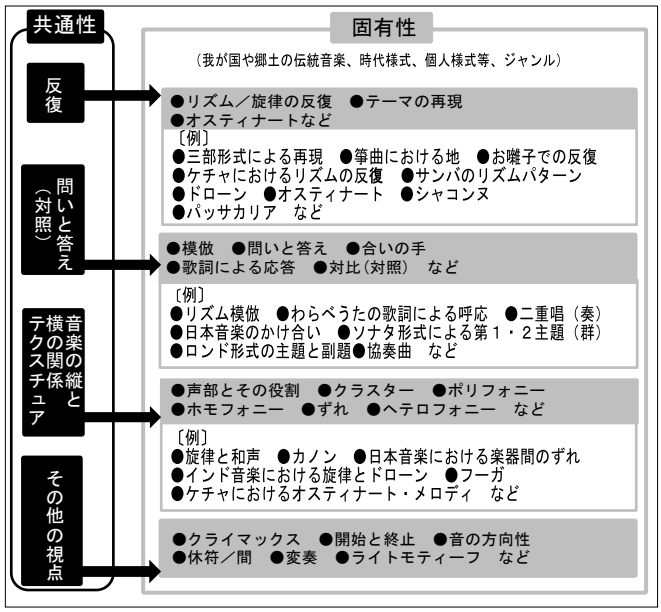


図１　我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の共通性と固有性の関係

これらのことから，すべての音楽に共通して存在する音楽の要素を示したのが〔共通事項〕における音楽の要素であり，高須の述べる共通性であると考える。この共通性を手がかりに，要素や構造を理解し比較することで，様々な音楽がもつ固有性が理解できるという観点から研究を進める。

３　我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動について

(1) 音楽の特徴を捉える手立てについて

加藤富美子（平成９年）は，鑑賞活動と表現活動の関連について，「リズム，メロディ，音色，形式などの音楽のしくみ（構造，諸要素など）は，歌ってみる・弾いてみる・聴き取るなどの活動を通して初めて音楽的に理解することができ，その理解がよりよい演奏表現やより深い鑑賞へとつながっていく。」[16]と述べている。また，坪能由紀子（2009）は，鑑賞することと表現活動の関連について，「私がいろんな音楽に含まれているんじゃないかって考えたものが〈反復〉と〈変化〉，〈問いと答え〉それからこれらはたくさんの音楽を聴いたことだけじゃなくて，実は演奏に参加してみたり，自分で音楽をつくったりした時に実感したことでもあるんです。」[17]と述べている。これらのことから，鑑賞活動における音楽の特徴を捉える手立てとして，その特徴について確かめながら実際に楽器などで演奏することが音楽の諸要素や構造の理解をより深めるために有効であると考える。

また，小島律子・中島卓郎・西園芳信（2009）は，鑑賞の能力について，「鑑賞では，道具の基本的なものは言語になる。他に身体的動きや絵も道具になるが，それらも言語と補完して使われると効果的である。」[18]と述べている。さらに，田中龍三（2008）は学習としての鑑賞について，「知覚・感受を通し，音楽のつくられ方すなわち音楽を形づくっている要素や構造との関係を主体的に学ぶことで成立する。その学習を確認する手だてとして，言葉で説明することや根拠をもって批評することが有効になる」[19]と述べている。鑑賞活動において，言葉を道具とし，知覚・感受したことを説明したり，根拠をもって批評したりすることは，他者と意見交換する活動で行われる。また，音楽の特徴について説明する際には，共通点や相違点等に着目して行われることが考えられる。これらのことから，鑑賞活動における音楽の特徴を捉える手立てとして，共通点や相違点等を言葉などで意見交換する活動や根拠をもって批評することが有効であると考える。

本研究では，鑑賞活動における特徴を捉える手立てについて，音楽の特徴を確かめながら実際に楽器などで演奏することを，音楽による表現活動とする。また，共通点や相違点等を意見交換したり，根拠をもって批評したりすることを，言語による表現活動と整理する。本研究では，音楽の特徴を捉える手立てとして，上記の二つの表現活動を取り入れる。

(2) 音楽による表現活動と言語による表現活動の関連について

（1）の二つの表現活動に関わって，中村透（平成25年）は，鑑賞指導方法の工夫・改善の中で「『運命』の音型のリズムを見ながら，オーケストラ楽器のメンバーと子供とが,ボディパーカッションや声，あるいは簡易な打楽器でともに反復したり，変奏したりしながら即興演奏を行うのです。そして，そのことによってどういう心理的興奮が巻き起こってくるのかを体感するのです。これは，いわゆる参加型の鑑賞と表現活動です。（中略）このような体験があったときに，面白い対話を生み出すはずです。音楽的な実感がない中で，言語だけが先走ることは避けたいですね。」[20]と述べている。中村は，鑑賞活動における音楽の特徴を捉える手立てとして，音楽による表現活動と言語による表現活動を関連付けて行うことの重要性について述べていると考える。したがって，本研究では，これらの二つの表現活動を関連付けて取り入れることとする。

(3) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動の構想図について

以上の文献研究を基に，本研究における構想を図２に示す。

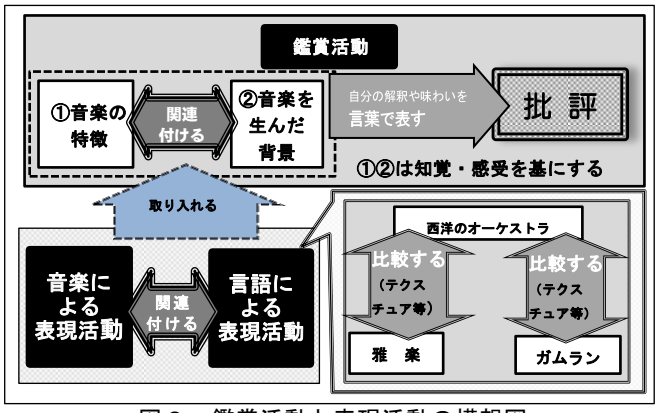


図２　鑑賞活動と表現活動の構想図

この図のように，テクスチュアの特徴を捉えさせながら，音楽による表現活動と言語による表現活動を関連付けて取り入れることで音楽の特徴を捉え，理解することができると考えた。

Ⅲ　研究の仮設及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の音楽の特徴を捉える表現活動を行えば，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることができるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法を表１に示す。

表１　検証の視点と方法

視点	検証の視点	検証の方法
視点１	○音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることができたか。 知覚・感受したことを基に，様々な音楽の特徴と，「音楽を生んだ背景」の関連を理解し，自分の解釈や価値判断をして批評することができたか。	・アンケート ・ワークシート ・批評文
視点２	○我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めるために有効であったか。	・アンケート ・ワークシート ・事前, 事後テスト ・授業観察

(1) 事前・事後アンケート

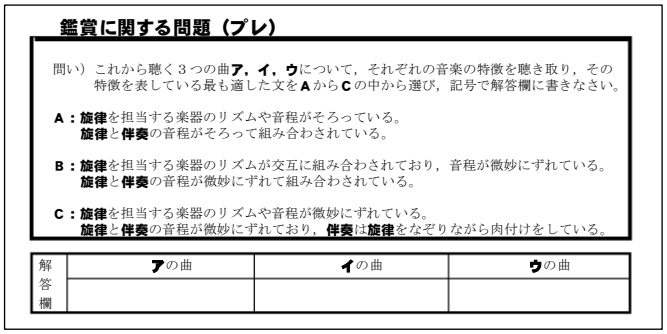
鑑賞における我が国や郷土の伝統音楽の特徴を捉えるために行った表現活動の有効性に関する生徒の意識の変容を把握するため，４段階評定尺度法によるアンケートを行った。事前・事後アンケートの１から４の項目は共通の設問とした。また，事後アンケートには，表現活動を取り入れた学習活動の有効性に関する生徒の意識を把握するための設問を加えた。事前アンケートの１から４の項目を表２に示す。

表２　事前アンケートの項目

1	日本や諸外国の音楽を聴いて，その曲のもつ雰囲気や表情などを感じ取っていますか。
2	日本や諸外国の音楽を聴いて，音楽の特徴を聴き取っていますか。
3	日本や諸外国の音楽を聴いて，音楽の特徴と人々の暮らしとともにある文化との関わりを理解していますか。
4	日本や諸外国の音楽を聴いて,音楽の特徴と文化との関わりについて,自分が気に入ったところを言葉に表していますか。

(2) 事前・事後テスト

図３に事前テストを示す。



鑑賞に関する問題（プレ）

問い）これから聴く３つの曲**ア**，**イ**，**ウ**について，それぞれの音楽の特徴を聴き取り，その特徴を表している最も適した文を**A**から**C**の中から選び，記号で解答欄に書きなさい。

A：**旋律**を担当する楽器のリズムや音程がそろっている。
旋律と**伴奏**の音程がそろって組み合わされている。

B：**旋律**を担当する楽器のリズムが交互に組み合わされており，音程が微妙にずれている。
旋律と**伴奏**の音程が微妙にずれて組み合わされている。

C：**旋律**を担当する楽器のリズムや音程が微妙にずれている。
旋律と**伴奏**の音程が微妙にずれており，**伴奏**は**旋律**をなぞりながら肉付けをしている。

解答欄	**ア**の曲	**イ**の曲	**ウ**の曲

図３　事前テスト

鑑賞における我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴のテクスチュアに関する課題について授業前後でどのように変化したかを把握するため，事前・事後テストを行った。事前・事後テストは,同じ設問とし,事後テストで使用した楽曲は,事前テストで扱った楽曲の異なる部分を聴いた。

Ⅳ　研究授業について

１ 研究授業の内容と計画

○　期　間　平成26年１月10日～平成26年１月24日
（全５時間）
○　対　象　所属校第２学年（１学級33人）
○　題材名　「いろいろなオーケストラを味わおう」
○　教材曲[(1)]組曲「王宮の花火の音楽」から“歓喜”
（以下，「歓喜」とする。），雅楽「越天楽」，ガムラン「グンデンボナン」
○　目　標
様々な「オーケストラ」に関心をもち，音楽を形づくっている要素や要素同士の働きが生み出す特質や雰囲気の特徴を知覚・感受し，音楽の特徴を音楽を生んだ背景と関連付けて理解し鑑賞する。

２　指導計画（全５時間）

指導計画について表３に示す。

表３　指導計画

次	時	学　習　内　容
一	1	○オーケストラの形態が多種多様であることを知る。 ○「歓喜」を聴き，音楽のテクスチュアに関わる特徴と「音楽を生んだ背景」を理解する。 ○西洋のオーケストラと比較させながら，雅楽「越天楽」とガムラン「グンデンボナン」を聴いて感じたことをワークシートにまとめる。
	2	○西洋のオーケストラと比較させながら雅楽「越天楽」の音楽の特徴や，ガムラン「グンデンボナン」の音楽の特徴を図形楽譜に表したり，意見交換をしたりしながら捉える。
二	3	○雅楽「越天楽」の音楽の特徴を，音楽による表現活動を通して，「音楽を生んだ背景」と関わらせて理解する。
	4	○ガムラン「グンデンボナン」の音楽の特徴を，音楽による表現活動を通して，「音楽を生んだ背景」と関わらせて理解する。
	5	○雅楽「越天楽」とガムラン「グンデンボナン」の音楽の特徴を理解し，「音楽を生んだ背景」と関連付けて理解したことを基に，それぞれの教材の批評文を書く。

第一次では，まず，生徒が既習曲である「歓喜」を聴き，テクスチュアと，音楽を生んだ背景等について理解させた。次に，西洋のオーケストラと比較しながら，研究教材の楽曲である雅楽「越天楽」とガムラン「グンデンボナン」の２曲を聴かせ，生徒が感じ取ったことをワークシートに整理させた。また，２曲について，音楽の特徴を図４のワークシートの中で図形に書き表し，「歓喜」との共通点や相違点を生徒同士で意見交換する言語による表現活動を行い，テクスチュアについて捉えさせた。

第二次では，テクスチュアに着目させ，旋律と伴奏（和音）の関わり合い，楽器の音色，強弱，音の長さや音の重なり等を確かめながら実際に楽器などで演奏する，音楽による表現活動を行わせた。図５は音楽による表現活動の生徒用楽譜である。雅楽の特徴である旋律のリズムのずれや伴奏が旋律をなぞりながら肉付けをすることに気付くよう指導した。また，ガムランではリズムの組み合わせや代替楽器で微妙な音程のずれに気付くよう指導した。さらに，第一次で書き表した言葉による表現活動のワークシートを基に，音楽の特徴について根拠をもって批評することを行い，言語による表現活動と音楽による表現活動の二つの表現活動を関連付けて指導した。最後に，生徒自身が音楽の特徴を理解し，音楽を生んだ背景と関連付け，自分なりに解釈したことや音楽に対する価値を批評文として書き表すことができるよう指導した。

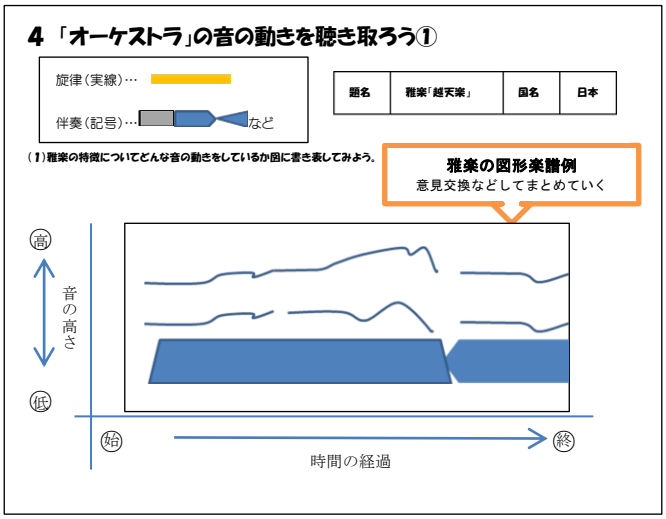


図４　言葉による表現活動のワークシート（抜粋）

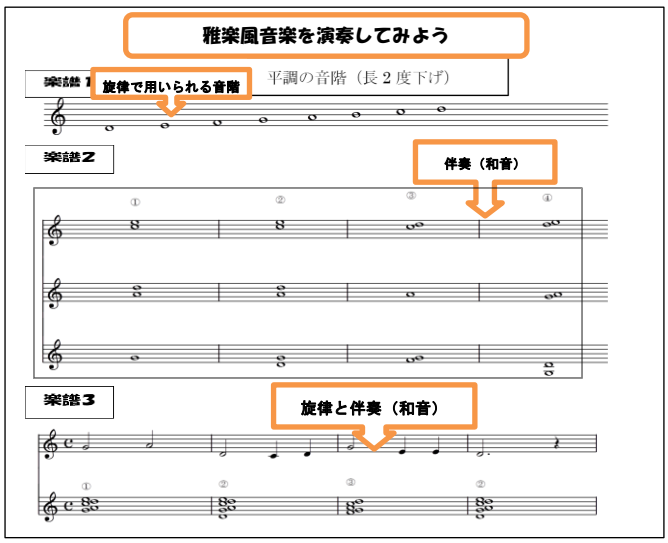


図５　音楽による表現活動の生徒用楽譜（抜粋）

３　教材について

本研究では，題材を「いろいろなオーケストラを味わおう。」として年間指導計画を参考に，特にテクスチュアについての特徴を捉えることのできる教材として，ガムラン「グンデンボナン」と雅楽「越天楽」を扱った。また，比較対照の一つとして，「歓喜」を教材とした。本研究では，「歓喜」を基に，

ガムラン「グンデンボナン」と雅楽「越天楽」を比較鑑賞し，「鑑賞の能力」について検証と分析を行った。生徒が，音楽の特徴を「音楽を生んだ背景」と関連付けて理解しているかを図るために作成した分析表を表４に示す。

表４　鑑賞曲の分析[2]

種類	音楽を形づくっている要素と下位内容		音楽を生んだ背景
	テクスチュア	テクスチュア以外	
オーケストラ「歓喜」	・旋律を担当する楽器のリズムや音程がそろっている。 ・旋律と伴奏の音程がそろって組み合わされている。	【音色】管弦打楽器の種類が多彩である。 【速度】主に指揮者の指示で決定しほぼ一定である。 【強弱】演奏記号に従い奏法や人数によって変化する。	宮廷や貴族のための音楽
雅楽「越天楽」	・旋律を担当する楽器のリズムや音程が微妙にずれている。 ・旋律と伴奏の音程が微妙にずれており，伴奏は旋律をなぞりながら肉付けをしている。	【音色】竜笛，篳篥：旋律を担当する。笙：和音を奏する。三管(竜笛，篳篥，笙)・両絃(琵琶，箏)・三鼓(楽太鼓，鞨鼓，鉦鼓) 【速度】鞨鼓が指揮者の役割をする。だんだん変化するところがある。 【強弱】演奏人数が変化する。 【形式】残楽三返	宮中の儀式，行事，御遊のための音楽
ガムラン「グンデンボナン」	・旋律を担当する楽器のリズムが交互に組み合わされており，音程が微妙にずれている。 ・旋律と伴奏の音程が微妙にずれて組み合わされている。	【音色】金属打楽器が中心である。 【速度】クンダン(指揮者役)が指示し速度の変化を行う。 【強弱】演奏人数の変化によって行う。	王室や儀式のための音楽

Ⅴ　研究授業の分析と考察

１　音楽の多様性を理解して鑑賞する能力が高まったか

本研究授業では，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることができたかどうかを，批評文と事前・事後アンケートから検証する。

(1) 批評文による分析

表現活動の感想を基に，雅楽及びガムランについて批評文を書かせた。批評文を読む対象を「まだ雅楽及びガムランについて学習していない中学１年生」と仮定した。

表５は，雅楽及びガムランの批評文における判断基準を示したものである。

表５　雅楽及びガムランの批評文の判断基準

評価	判　断　基　準
A（十分満足できる）	①「感じ取ったこと」について「妥当な理由」をテクスチュアや他の要素と関連付けて記述している。 ②音楽の特徴と「音楽を生んだ背景」を明確に関連付けた記述をしている。 ③音楽全体について，①，②を関わらせて自分の解釈や価値評価を明確に記述している。
B（おおむね満足できる）	①「感じ取ったこと」について「妥当な理由」をテクスチュアと結びつけて記述している。 ②音楽の特徴と「音楽を生んだ背景」を関連付けた記述がある。 ③おおむね音楽全体について，①，②を関わらせて自分の解釈や価値評価の記述がある。
C	Bの①から③の判断基準について一つ以上が到達していない。

本研究では，表５の判断基準で，雅楽，ガムランいずれかについてできていれば，音楽の多様性を理解して鑑賞していたと把握することとした。

図６は，表５の判断基準を基に，生徒の批評文を評価した結果をグラフにしたものである。

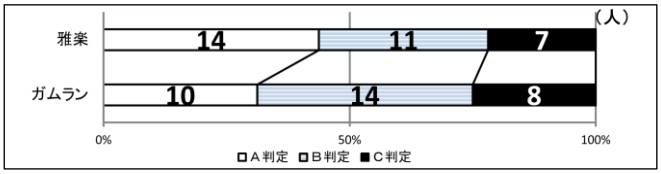


図６　批評文の評価結果

A判定の生徒については，根拠をもって価値評価し，雅楽又はガムランの魅力やよさなど自分なりの言葉で記述していることを確認することができた。生徒ａのガムランを学習した後の「批評文」（A判定）の記述内容を示す。

「金属ならではの音色」
「森」や「もののけ姫」を想像できませんか？「もののけ姫の途中でながれそう」とか「森の中のミステリー」とか。私はそう思いました。最初は１つの楽器から始まり，主に金属製の楽器がどんどんふえていき，テンポがはやくなり，ゆっくりになって終わります。この曲は，金属の楽器ならではの音色とその楽器による色んなリズムの組み合わせを活用して，儀式っぽさを表現しています。私は，テンポがゆっくりな所とはやいところのアップダウンがおもしろいと思いました。

※下線は稿者　実線（＿＿）は「知覚・感受」したことの記述。点線（‐‐‐‐）は「知覚・感受」したことと「音楽を生んだ背景」と関連付けた記述。二重線（＝＝）は自分の解釈や価値の記述。

生徒ａの批評文の記述内容

生徒ａは，「金属の楽器ならではの音色とその楽器による色んなリズムの組み合わせを活用して，儀式っぽさを表現」と記述し，ガムランの特徴であるリズムの組み合わせについて，楽器の音色と関わる記述をしており，ガムランが儀式等で使われた音楽であることとも結びつけて記述できている。また，「ゆっくりな所とはやいところのアップダウンがおもしろい。」と記述し，曲のテンポの変化にも着目し，この曲の魅力として記述できている。

なお，C判定の生徒が雅楽では７人，ガムランでは８人いた。これらの生徒は，「感じ取ったこと」に対する「理由」が書けなかったり，音楽の特徴が「音楽を生んだ背景」と結び付けられていなかったりすることにある。これは知覚・感受させる段階から友人と意見交換を活発にさせるなどして理解をさせるべきであると考える。

以上のことから，音楽の多様性を理解して鑑賞することがおおむねできたと考える。

(2) 事前・事後アンケートによる分析

図７は，アンケートを基に，授業前後の生徒の意

識の変化をグラフに表したものである。

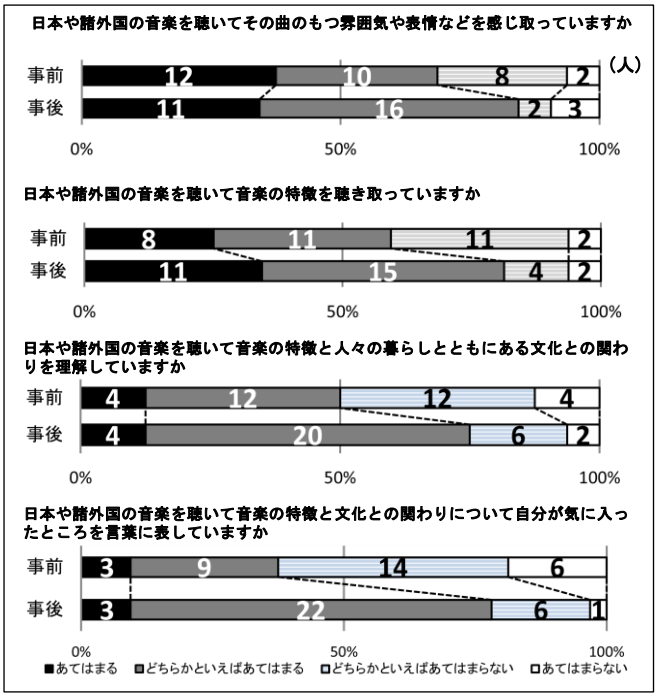


図７　事前・事後アンケートの結果

事前・事後アンケートを比較し，事後アンケートでは，肯定的に回答した生徒はどの項目でも増加している。この回答結果から，知覚・感受や音楽文化を理解して自分の言葉で説明できるようになった生徒が増えたことが分かる。

（１）（２）から,生徒は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力が高まったといえると考える。

２　我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めるために有効であったか

本研究授業における，我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めるために有効であったかどうかをワークシートの記述内容の変化，授業観察，事前・事後アンケート,事前・事後テストから検証する。

(1) 事後アンケートによる分析

図８は，事後アンケートの結果をグラフで表したものである。項目６については，肯定的に捉えた生徒は，26人（81.3%）であった。この26人の生徒は視点１（批評文の判定）においてＡ又はＢと判断した生徒である。このことから８割を超える生徒が，音楽の特徴を捉える表現活動は役立ったと実感しており，音楽の多様性を理解して鑑賞していたと考える。否定的に捉えた生徒は，６人（18.7%）であった。この６人の生徒は視点１（批評文の判定）でＢ又はＣと判断した生徒である。音楽の特徴を複数見つけることができなかったことが課題と考える。

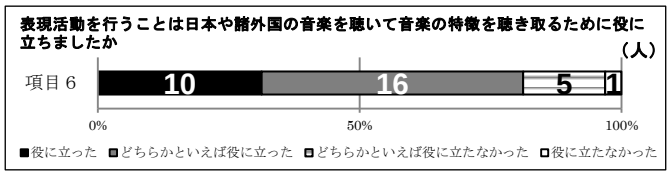


図８　事後アンケートの結果

(2) 表現活動におけるワークシートの記述内容の変化による分析

生徒ｂの，ガムラン音楽を用いて記述したワークシートの記述内容を示す。生徒ｂは事前アンケートで否定的な回答をしている項目があったが事後アンケートでは，全ての項目が肯定的な回答になった生徒である。

（感受後）
・不思議な感じ。・何かが出てきそう。
（表現活動後）
・日本の楽器とは違い，響く楽器が多かったと思いました。特に打楽器が（ゴングなどの）多く，日本の儀式とは違い，静かな感じでなく，華やかな雰囲気なのかなと思いました。

生徒ｂのワークシートの記述内容

第１時の音楽を聴いて感受したことを書いた内容が第４時までの音楽による表現活動と言語による表現活動後に変化が見られた。

ガムラン風音楽を演奏してみようの学習では，手拍子で,まず,ガムランの特徴的リズムを演奏した。生徒ｂは,音の組み合わせやテクスチュアに気付き，言葉による表現活動においてガムラン音楽の打楽器による演奏やグループ内で意見を深めながら図形楽譜にまとめていた。その後，音楽による表現活動において，「音があちこちから聞こえてくる。スピーカーがたくさんある感じ」とテクスチュアに着目し，表現活動をリードした。そして音色に着目し，代替楽器としてのボウルを使ったグループ学習では,「たたく場所で音色が変わるのは面白い。王宮ではどんなのがいい？」とグループ内に投げかけた。また，「日本より派手？」と雅楽と比較した発言をし，音色をいろいろ変える試みをしていた。批評文では「ピッチのずれ」や「リズムの組み合わせ」に触れ，インドネシアは日本より派手な儀式をするという印象をもち，記述していた。このような記述は，視点１（批評文の判定）においてＡ又はＢ判定とした他

の生徒も同様に確認できた。このことから音楽の特徴を捉える表現活動は音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めるのに有効であったと考える。

(3) 事前・事後テストによる分析

事前・事後テストの結果を図９に示す。

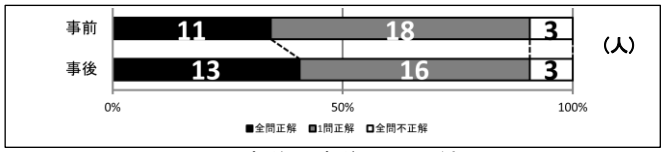


図９　事前・事後テスト結果

事前・事後テストにおいて，全問正解は２人しか増えなかったが，内訳を確認すると，一問正解から全問正解や全問不正解から一問正解又は全問正解のように伸びが見られたのは８人で，下がったのは６人であった。伸びた８人のうち，視点１（批評文の判定）でＡと判定したのは５人で，Ｂと判定した生徒は３人であった。下がった６人のうち，Ｂと判定したのは３人で，Ｃと判定したのは３人であった。このテストでは，全問正解することでテクスチュアを捉えることができたと判断したいため，ある一定の効果があったと考える。しかし，19人の生徒が全問正解できなかったことからテクスチュアを捉えることについては課題が残ったと考える。

したがって，（１）（２）（３）から我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の音楽の特徴を捉える表現活動を取り入れた学習活動は，音楽の多様性を理解し鑑賞することに有効であったといえる。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

○　中学校音楽科の鑑賞の指導において，我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴を捉える表現活動を取り入れた学習活動は，音楽の多様性を理解して鑑賞する能力を高めることに有効であることが明らかとなった。

２　今後の課題

○　本研究を通して，テクスチュアの理解が深まらないなど能力の高まらない生徒がいた。これらの生徒に対して，テクスチュアに着目する指導を繰り返し行い，テクスチュアの理解を段階的に深めていく指導を工夫していく必要がある。

○　表現活動を取り入れた学習活動を他の鑑賞曲や他学年でも実践し，その成果を検証していく必要がある。

【注】

(1) 教材曲は生徒の小学校での教科書掲載曲や中学校教科書掲載曲を選び，ガムラン曲については純粋な器楽曲であり，王室とのつながりが強い中部ジャワのものとした。

(2) 柘植元一・塚田健一(2001)：『はじめての世界音楽』音楽之友社，福井昭史(2006)：『よくわかる日本音楽基礎講座』音楽之友社，島崎篤子・加藤富美子(1999)：『授業のための日本の音楽･世界の音楽』音楽之友社，田中健次(2011)『図解　日本音楽史』(東京堂出版)，『音楽大事典』(1988)平凡社を参考にして稿者が作成した。

【引用文献】

1)　文部科学省（平成20年ａ）：『中学校学習指導要領』東山書房 p. 77

2)　文部科学省（平成20年ｂ）：『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社 p. 53

3)　坂本暁美（2009）：『最新　中等科音楽教育法』音楽之友社 p. 215

4)　斉藤百合子（2009）：『中学校音楽科の授業と学力育成－生成の原理による授業デザイン－』廣済堂あかつき p. 25

5)　神保常彦(1988)：『音楽大事典』平凡社第２巻 pp. 646-647

6)　西園芳信（2009）：『中学校音楽科の授業と学力育成－生成の原理による授業デザイン－』廣済堂あかつき p. 30

7)　田中龍三（2009）：『最新　中等科音楽教育法』音楽之友社 p. 86

8)　文部科学省（平成20年ａ）：前掲書 p. 77

9)　藤沢章彦（2012）：『中学校・高等学校教職課程　音楽科教育法』教育芸術社 p. 12

10)　西園芳信・伊野義博（2010）：『中学校教育課程講座音楽』ぎょうせい p. 92

11)　小原光一・渡邊學而（平成20年）：『音楽鑑賞の指導法“再発見”』(財)音楽鑑賞教育振興会編 p. 103

12)　西園芳信・伊野義博（2010）：前掲書 p. 105

13)　西園芳信・伊野義博（2010）：前掲書 p. 87

14)　文部科学省（平成20年ｂ）：前掲書 p. 53

15)　高須一（2012）：『音楽づくりのアイディア集　音楽をつくる・音楽を聴く』音楽之友社 p. 54

16)　加藤富美子(平成９年)：『音楽教育論』教育芸術社 p. 213

17)　坪能由紀子（2009）：『鑑賞の授業づくりのアイディア集　へ～そ～なの！音楽の仕組み』音楽之友社 p. 136

18)　小島律子・中島卓郎・西園芳信（2009）：『中学校音楽科の授業と学力育成』廣済堂あかつき p. 146

19)　田中龍三（2008）：『教育音楽12月号』音楽之友社 p. 30

20)　中村透（平成25年）：『初等教育資料10月号』 東洋館出版 pp. 55-56